

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

特集
早春の
庄内花便り
庄内憧憬
柳澤 紀子 美術家

3

2012 March/April
TAKE FREE
NO.10

Cradle 3

美しくなつかしい、日本をのせて。
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2012 March/April

平成24年3月1日発行（隔月奇数月発行）第2巻4号（通巻10号）

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 株式会社 出羽庄内地域デザイン 電話0235（64）0888
制作／Cradle編集室 山形県鶴岡市京田2-59-3「コマツ・コーポレーション」電話0234（41）0012

FIDEA GROUP



鶴岡市／鶴岡公園

草木芽生える 心ときめく 庄内の春

東日本大震災から一年。
庄内銀行は一日も早い復興をお祈り申し上げます。

 庄内銀行

北前船交易で栄華を誇った明軽の地。その背後にあるものに
庄内人の精神的奥行きの深さを生む理由があるように思う。

2008年5月11日から約1ヵ月間、酒田市美術館で「永遠の瞬間 越境する身体」の展覧会を開かせていただいた。友人の生化学者、大島美恵子さんが東北公益文科大学に移り、副学長、美術館の理事も兼ねられていご縁であった。

私も長く絵画の制作をしてきて、多くの展覧会を開催してきたが、この酒田での個展ほど気持ちの高揚した展覧会はなかったように思う。それは多分に、庄内という土地柄、庄内人の人柄と関係していると思うのだ。まず、美術館と周辺の環境が良い。ここは酒田市が文教ゾーンとして郊外に造成した場所だが、大学と2つの美術館の集積が、これを取り巻く河、池沼、農地、遥かな山並みと調和して美しい空間を創出している。

このことは打ち合わせのために初めて大学に大島さんを訪ね、そこから地続きの美術館へ徒歩で案内していただいた時からの印象であった。広大な芝生の丘に置かれた安田侃^{かん}の白い大理石のモニュメントが、鳥海山の山並みに否応なく視線を誘うのだ。

池原義郎設計の美術館は、過不足のない規模で、清楚な外観は周囲の風情とマッチしているだけでなく、内部の展示物に対して建築は禁欲的たらんとしているようだ。内部は内部で所要所にギャラリー（回廊）が設えられ、室内外の空間が一体化するような錯覚を与える。こうした美術館とその環境とが私の心理に肯定的な作用を及ぼし、気分的にかなり「乗せられた」のも事実であった。酒田は庄内平野が産出する「庄内米」を大阪に運ぶ北前船の母港で、表層的には明暗軽重でいうと明軽の地といえよう。しかしその背後地は庄内平野であり、さらに背後は出羽三山を代表とする山岳地帯である。そこに庄内人の精神的奥^{おく}行きの深さが生まれる理由があるように思う。

私の個展では、美術館の創設に貢献された平田牧場の新田嘉一会長が祝辞を述べてくださった。「今日、私はこの会場で柳澤さんの作品を通して見せてもらったが、初めて、柳澤さんが人間とは何かということをズツと考えて作品を制作しているこ

とが分かりました」。その言葉は重く、新田さんの口からこんなにも深い言葉が出てくるとは地元の人たちでさえ予想外だったらしく、会場のここかしこからどよめきが上がったのだ。新田会長は黒川能を画いた作家の収集家でもあることからすれば、何でもないことであつたらう。

展覧会の会期中、私も、東京やニューヨークから来会してくれた友人たちも、月山や羽黒山に出掛けた。月山への途すがらには注連寺、大日坊に参詣し、即身仏の存在に衝撃を受けた。また、羽黒山の五重塔を訪ねながら、山伏の修行ぶりの話を聞いた。その短い間の交流の中で感じた庄内の人々の奥ゆかしさは、こういうところに淵源するのではないかと思つた。



安田侃《翔生》（酒田市美術館）
左：酒田市美術館でのギャラリートーク（2008年）



やなぎさわ・のりこ／静岡県浜松市出身。1965年、東京藝術大学大学院美術研究科油絵専攻修了。71年〜75年までニューヨークに滞在し、版画工房プリントメーカー・キングワークショップで制作活動を行う。91年、静岡県文化奨励賞を受賞。92年、文化庁芸術家派遣在外研修員としてロンドンへ。97年〜99年には、個展「杜・森展」でブルガリア、イスラエル、ルーマニアを巡回。01年、第10回山口源大賞受賞。同年より11年まで武蔵野美術大学造詣学部油絵学科教授を務める。08年、酒田市美術館で個展を開催。美術家として銅版画、ミクストメディア作品、パブリックアートも手がける。

特集

早春の 庄内 花便り

薄氷は、冬の名残の花。冬の佇まいを残す
すべての凍てを解くように
東風は吹いて、春をつれてきます。
花々が、喜びと儚さを含んで咲く時、
私たちは、約束していた再会のような気持ちで
また、新しい季節を歩きはじめます。
花の便りは、希望の知らせ。
今か今かと待っている、今日のびるです。

トビラ写真撮影Ⅱ八尾坂弘喜(旧東田川郡会議事堂)
編集、P.9・11・13人物撮影ⅡCradle編集部



今年は長引く冬を考慮して、梅まつりを例年より遅い4月8日(日)と15日(日)に開催予定。
写真提供＝すべて湯田川温泉観光協会

湯田川温泉
梅林公園

鶴岡市湯田川

梅

楚々として上品な
香りを放つ梅の花は
心に深く染み入ります。

東北一といわれる湯田川温泉梅林公園は、竹林に囲まれた緑豊かな丘陵にあります。3ヘクタールにも及ぶ園内には、丹精込めて世話する方々のおかげで、花梅300本をはじめ、花桃、つつじ、さつき、牡丹、あやめ、萩などが春から晩秋まで咲き誇ります。梅の開花は例年3月下旬から約1ヵ月。早咲き・遅咲きが次々と花開き、訪れる人を楽しませてくれます。雪国ならではの雪上梅見も風流な光景で、地元の旅館青年部が懸命な雪かきをして散策路をつくります。本格的に見頃を迎える頃には、雪解けの間から山野草が咲き始め、梅の花との共演がくり広げられます。繚乱で華やかな桜とくらべ、楚々としてつつましげに、そして上品な香りも放つ梅の花は、万葉集に詠まれた一番数多い花にふさわしく、私たち日本人の心に深く染み入ります。そして梅の季節が終わる頃、園内に咲く一本の大きなし

だれ桜が、梅園の賑わいを締めくくります。

春一番に咲く梅の花に誘われて、梅林公園には毎年多くの人が訪れます。その方々に一層楽しんで頂こうと、当温泉では十数年前から「梅まつり」を開催。おかみたちは旅館を離れ、野点^のでおもてなしをいたします。抹茶とともに供するお菓子^は、しつとりした味わいのじょうよ饅頭^{名称}の「想ひのまま」は、一本に紅白ともに咲く梅の木^のことで、縁結びにつながる縁起のよい名前です。この時だけのために、おかみたちが心を込めてすべて手作りしています。また温泉街では、各旅館がおいしいお花見弁当の販売を行います。梅の木の下でお弁

当を開きながら、江戸時代からの伝統芸能である湯田川温泉神楽や、地区踊りサークルによる湯田川温泉小唄などをご覧いただけます。華やかさと賑わいが添えられた、楽しいひとときとなることでしょう。

今年は開湯1300年の記念すべき年で、梅まつりと梅まつりに始まり、孟宗まつり、ほたるまつり、七夕まつり、また、昔ながらの伝統料理でもてなす「おかみ乃おへぎ」や若者たちが取り組んでいる「朝ミュージアム」「流せ麦きり」「若女将のガ

「湯田川女将会」会長の大塚せつ子さんに
湯田川梅林公園の春についてエッセイを綴っていただきました。



基内旅館女将。「湯田川女将会」会長として当温泉地の活性化や観光振興に尽力するほか、「庄内たび宿おかみの会」と「やまがた女将会」の副会長も兼任。昨年春には着物を愛する会「庄内着物女子」を女性3名で発足、イベントなどを開催している。上は梅まつりの野点風景。

湯田川女将会会長
大塚せつ子さん
Ootsuka Setsuko



近くにはこんなところも

梅以外にもさまざまな花が咲く、湯田川梅林公園



一本のしだれ桜

湯田川温泉が花街として賑わっていた明治時代に植樹されたという大きなしだれ桜。今も近くに金比羅さまやお稲荷さまがあり、かつては茶屋もあったとか。梅が咲き終わる頃に人知れず開花します。

愛らしい山野草

雪解けの後に咲き始める山野草は、キクザキイチゲ(別名・菊咲き一輪草)、黄スミレ、ウスバサイシンなど。しばらくは梅の花と春の華やぎを共演します。写真はキクザキイチゲ。白の花も咲かせます。





農事法人 松ヶ岡農場会長

古野嵩恒さん

Huruno Taketsune

昭和19年生まれ。昭和58年、柿の補完作物として桃の導入を決意。風雨による病害に苦労を重ねつつも、果敢な開拓精神で産地化に成功。
下:古野さんが修復に携わる「爺小屋のカシミザクラ」は元々、幹回りが4.0〜4.5m程もあり、貴重な桜として知られています。



近くにはこんなところも

季節を追うごとに彩りが変わる、旧庄内藩士・開墾地の春



松ヶ岡の水芭蕉

ゆっくりと遊歩道からの眺めが楽しめる水芭蕉園。可憐な花の見頃は4月初旬〜。羽黒町の花でもある水芭蕉は比較的自生しやすく、以前は羽黒街道沿いなど町内各所で見かけられていました。

開墾場の桜並木

大蚕室を背に咲き誇る桜並木は、荒野を開拓した旧庄内藩士の気概を感じさせます。大正10年、開墾創業50周年に記念植樹した、少し早咲きの本陣脇の「大山桜」は、本陣周辺のシンボリック的存在。4月中旬〜。



開墾場を東西にぬけるソメイヨシノの桜並木が一斉に咲きこぼれます。
それから5日ほど遅れて桃畑に色濃いピンクの花が開き始めると、農場はさらに彩り豊かになります。桃は果実を大きくならせるように摘蕾するため、「細い枝にポツポツと咲く感じだけれど、その枝ぶりも風情がありますよ」と古野さん。
いまでは「あかつき」など桃の名産地となった松ヶ岡農場ですが、桃栽培を導入した30年前は、苦労の連続だったそうです。「桃は風雨に弱いのが難点。庄内は海山からの風が吹きつける土地柄だけに、防風用の杉木を植樹するなど、環境を整えること

に苦心しました」と当時を振り返ります。
桃の花が満開になる4月下旬、松ヶ岡地内では遅咲きのカシミザクラが白い小花をつけ始めます。古野さんが「空に伸びた大枝に花がつき始めると、本当に霞がかかったようだった」とその美しさを懐かしむのは、杉木立を背に桃畑に鎮座する「爺小屋のカシミザクラ」。開墾前から松ヶ岡の歩みを見つめてきた樹齢約400年以上の大樹は、平成4年に町の天然記念物指定を受けましたが、現在は幹の一部分を残すのみ

となりました。古野さんは「近代化の名のもとに祖先が守り続けてきたものが消え始めています。当時の記憶をもつ私たちだからこそ守り続けていきたい」と木の再生を願い、専門家と修復作業を続けています。
今年、開墾140年を迎える松ヶ岡。この地の、常に未来を切り拓きながらも先人の思いを顧みることを忘れない人々の精神性が、厳しい冬を乗り越えて訪れる花の季節を、一層美しいものにしていくようです。
土門かおり 文

「桃の花が加わって松ヶ岡は華やかになりました」(古野さん)。
明日を切り拓いた人々の思いと、花の美しさが心に染みます。



4月下旬になると、残雪の月山と杉木立を桃畑のピンクの花々が美しく彩ります。
写真提供＝すべて農事法人 松ヶ岡農場

松ヶ岡

鶴岡市羽黒町

桃

中山河川公園

遊佐町直世

桜

鳥海山と清流と
暮らしのそばに
寄り添う桜。

桜は、四季の豊かな日本にあつて、春を告げる象徴的な花。爛漫と咲いて、私たちを新しい季節の喜びで包んでくれます。

桜の名所は各地にあります。遊佐町の中山河川公園は、樹齢50年級のソメイヨシノが川沿いに並ぶ、憩いの名所。特別な華やかさはないながらも、鳥海山を望む水辺の美しさと、庶民的などこかさにひかれ、毎年、たくさんの方が訪れています。

この桜並木は今から50年ほど前、地区の青年団によって植えられました。その一員だった阿曾一良さんは現在、中山地区の区長を務めています。「小学生の頃、この村外れさ桜の木があつての。その木に登って『桜ん坊』をとって遊ぶのが、学校帰りの日課だったなよ」。その桜は子どもたちの成長を見届け、阿曾さんたちが成人する頃に、河川改修のため伐採されました。

「思い出の桜ん坊の木がなくなってしまったのは寂しかったの。それで我々青年団で話し合つて、桜を植えることにしたな」。

そして昭和34年、鳥海山を源流とする洗沢川沿いに、50〜60本の苗木を植樹。以来、地区の皆さんが「おらほの桜」と親しみ、今も全戸で下草刈りを行つて管理しています。花が咲く頃には、川の上流から下流の4カ所に、こいのぼりを掛けるのも恒例行事。「20年前、家で使わなくなったこいのぼりを川の対岸に掛けたのが始まり。『使ってくれ』つて、お下がりがいっぱい集まったもんだだけ」。最近では地区の子どもが減つて、お古も少なくなったそうですが、

澄んだ流れの洗沢川。昔はここでざっこしめをして遊んだ、と阿曾さん。

写真撮影＝八尾坂弘喜



子どもの成長を願うこいのぼりが風に泳ぐ姿は、地域で一心に育てられた桜と共に、景観を象徴する一つとなっています。

こうしていつしか、知る人ぞ知る花見スポットとなり、平成6年には河川公園となつて、広場や護岸が整備されました。今は穏やかな流れの洗沢川ですが、「昔は暴れ川だったなよ」と阿曾さん。その名残が今も石垣などに見られます。「洪水から守る水門が各家に残つてんなは、今は珍しいかも。ここの桜は本数も少ないし、

決して有名になるようなものではないけれども、この昔からの家並みと、鳥海山と、きれいな水の流れが、見に来てくれる人の心を和らげるんでないかなあ」。

花見の出路が並ぶわけでもなく、ただ、いつもの暮らしの中にある桜の名所。地元の人には花見客にも普段どおりの挨拶を投げかけ、人々はお弁当開きや散策、スケッチや写真と気ままに花を楽しみます。そのあたたかな桜色の風景は、今年もたくさんの人にやさしい春の余韻を残してくれそうです。

残雪の鳥海山から流れる、清澄な洗沢川。地域の人たちの春と共に咲いてきた桜は、ぬくもりに満ちあふれています。

遊佐町中山地区 区長

阿曾一良さん

Aso Kazuyoshi

遊佐町直世（すぐせ）で農業を営み、平成23年より区長となる。中山河川公園の桜は、東北復興支援プロジェクト「東北・夢の桜街道～桜の札所88カ所」（主催：美しい山形・最上川フォーラム、美しい多摩川フォーラム）に選出されています。下：花時は一瞬でも管理は1年中。6月のアメシロ消毒。



近くにはこんなところも

少し足をのばして、鳥海の山裾から海岸沿いへ。



写真撮影＝島中裕之

三崎公園

山形と秋田の県境にある標高70mの三崎山（不動崎・大師崎・観音崎）一帯。鳥海山噴火の溶岩でできた海岸の岩場には、スカシユリ（イワユリ）が自生し、6～7月に花を咲かせます。



十六羅漢～釜磯海水浴場

遊佐町吹浦の国道345号沿いの海岸には、草地にアサツキの花が群れて咲く姿が見られます。花の時期は6～7月。春頃の葉や球根は食用としても親しまれています。

玉川寺の 九輪草

羽黒山のふもとにある国見山玉川寺は、庭園に四季折々の花が咲くことから「花の寺」と呼ばれています。特に5月中旬から6月初旬に咲く九輪草は、全国的にめずらしい純群落があることで有名です。



写真提供＝玉川寺

下田沢かたくり園の かたくり

7年の歳月を経てわずか数日間のみ咲くかたくりは別名「春のはかない命」。春を告げる花が一面に咲くかたくり園は、鶴岡市朝日地域、赤川のつり橋を渡ったところにあります。見頃は4月下旬～5月上旬。



いこいの村庄内の チューリップ

庄内浜からすぐの松林に囲まれた「いこいの村庄内」には、東北でも最大級のチューリップ畑があります。見ごろは4月下旬から5月上旬。約10万球のチューリップが色鮮やかに咲き広がります。



写真提供＝鶴岡市朝日庁舎



写真提供＝あつみ観光協会

あつみ温泉ばら園の ばら

熊野神社境内にあるあつみ温泉ばら園は、昭和37年の開園当初から守られてきた品種を含め、約90種3,000本のばらが6月から10月まで次々と咲き誇ります。毎年6月には「ばら園祭り」を開催。

九輪草

片栗

薔薇

春の花が終わると、バトンタッチするかのようさまざまな花が開きます。数ある花の名所から、代表的なところをピックアップしました。

新緑の季節から初夏にかけて
可憐な姿をみせる庄内の花々。

紫陽花



本間美術館の ツツジ

庭園「鶴舞園（かくぶえん）」は、文化10年、本間家四代光道の時代に作庭された回遊式庭園。鳥海山を借景に、鶴が舞い降りたとされる蓬莱島を囲む庭内では、春から初夏にかけて咲く白ツツジが見事。



風車村の ラベンダー

庄内町狩川のなだらかな丘の上にある風車村は、6月下旬になるとラベンダーの香りが風に漂います。村内には風車や、展示施設、遊具などがあり、庄内平野を眺めるビュースポットとしても有名。



土門拳記念館の アジサイ

最上川左岸に広がる飯森山公園内の「土門拳記念館」は、氏の全作品を収蔵する写真美術館。6月下旬～7月初旬、記念館そばの「拳湖」を囲むように98品種のアジサイが色とりどりの花をつけます。

牛渡川の バイカモ

遊佐町の箕輪地区を流れる牛渡川は、その水流のほとんどが鳥海山の湧水で、透明度が高く、年間の水温がほぼ一定。6～7月、水面に見えるバイカモは水のきれいな場所を選んで咲く花で、清流の証。



写真撮影＝畠中裕之

飛島

飛島の トビシマカンゾウ

酒田市の離島、飛島は対馬海流の影響を受け、年平均気温12℃と温暖で、暖地系と寒地系の植物が混生しています。西海岸に群生するトビシマカンゾウは、飛島と佐渡島に分布し、見頃は6～7月。

梅花藻

北庄内

南庄内

鬱金香

菜の花

三川町の 菜の花

毎年5月が近づく三川町は黄色いじゅうたんを敷き詰めたように菜の花色で染まります。連休中は「なの花温泉田田」で「菜の花まつり」を開催。菜の花娘をモデルに写真撮影会などが行われます。

城下町鶴岡の 雛菓子

桃の筍句が近づく頃、鶴岡市内の菓子店に雛菓子が一齐に並ぶ。それはまるで、まだ明けない水墨画の世界に春爛漫の花々が咲くかのようだ。

墨画の世界に春爛漫の花々が咲くかのようだ。

通常、雛菓子といえば全国的にはひし餅やあらねなどが定番だろう。だが鶴岡の雛菓子は山海の幸を再現したリアルなもので、しかも、それほど大きくない城下町に驚くほどある菓子店の多くがこの独特な雛菓子を作っている。旧市街に店を構える江戸末期創業の久栄堂菓子舗もその一つだ。

もともと久栄堂では鶴岡の伝統的な雛菓子であ

る「盛り菓子」を作っていた。有平糖（飴細工）

と打ち菓子などを組み合わせたものである。その後、多くの店が生菓子の練りきりを作るようになる中で、久栄堂も練りきりに力を入れるようになった。「打ち菓子和違つて型を使わないで一つずつ手作りする分、職人の腕が光るんです」と五代目店主の五十嵐順一氏。それを象徴するかのように、サクラマスに焼き目が入ったり、ミカンの皮がめくれていたり、それぞれのモチーフに店の個性が現れていて面白い。いつの頃からか、お店を越えて職人たちが刺激し合い、切磋琢磨し合つて築いてきた鶴岡の雛菓子は、庄内の雛文化と同様に地域の伝統文化となったのだ。「鶴岡の雛菓子を他県の人に送るとすごく喜ばれる」のは、単にお菓子を送るのではなく、地域の大切な文化を届ける、その気持ち伝わるからだろう。

深い雪に覆われたこの冬、そして震災から一年が経過するこの春。厄除けの守り神であるお雛さまにわが子の成長を祝って雛菓子を捧げたら、平安への祈りを胸に、有難ういただきたい。



久米堂菓子舗の雛菓子製造販売は、2月中旬から4月上旬まで。地方発送も可。展示用にはもちのよい餡平雛菓子を作っている。4代目の五十嵐金吾氏は、平成23年度鶴岡市卓越技能者表彰受賞。またお雛さまを各所で展示する「鶴岡雛物語」に合わせ、致道博物館では4月上旬まで鶴岡市内の菓子舗13店の雛菓子を一同に紹介する「お雛菓子展」を開催中。

久栄堂菓子舗 ☎0235-22-2034





庄内写真季行 8 鳥海山

カモシカの食事風景に出会った。
ここには森の時間が流れていた。

いきものに出会う最良の方法に、『探さない』ということがある。カモシカとの出会いもそうして生まれた。野鳥の観察に山に向かい、通い慣れた尾根道の、山桜の根元に腰を下ろす。そこを今日1日の場所と決めた。

谷を見渡し、動かずにじっとしていると、1頭のカモシカが山菜を食べながら移動してきた。ちらりとこちらに目に向けたが、食事のほうが大事とみえる。挨拶もかわせぬまま、カモシカは悠然と目の前を過ぎていった。

写真・文＝斎藤政広

【ニホンカモシカ】
ウシ科のは乳類 特別天然記念物